

ロバータ さあ歩きましょう

佐々木たづ



ロバータ さあ歩きましょう

佐々木たづ
絵 長尾みのる



ロバータ さあ歩きましょう

N.D.C. 913 講談社 昭和44年 215P 20.5cm

佐々木たづ・作

(著者の略歴)

- 昭和7年 東京生まれ。
◇ 23年 都立駒場高等学校入学。
◇ 25年 緑内障のため両眼失明。
◇ 34年 童話集「白い帽子の丘」第1回児童福祉文化賞受賞。
◇ 37年 イギリスの盲導犬協会にはいり、盲導犬ロバータを得て帰国。
◇ 40年 「ロバータ さあ歩きましょう」第13回日本エッセイストクラブ賞受賞。
◇ 41年 米国のパーキンス盲学校にロバータとともに留学。
◇ 44年 「わたし日記を書いたの」出版。
-

昭和44年7月28日 第1刷発行

著 者 佐々木たづ

発 行 者 野間省一

発 行 所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号 112
振替口座 東京 3930 電話 東京(942)1111(大代表)

印 刷 所 豊国印刷株式会社

双美印刷株式会社

製 本 所 有限会社大光堂

定 価 490円

© 佐々木たづ 1969

みなさん、お読みになった感想をお知らせください。

今後の出版の参考にさせていただきます。

本書の権利はすべて著者に帰します。

Printed in Japan

(分) 8-0-93 (製) 231039 (出) 2253 (0)

もくじ

〈第一部〉ロバータ 話してきかせましょう

八月四日の悲しいできごと.....	8
たえられぬ真白い太陽の光.....	16
視神経を圧迫する蓄膿の手術.....	21
・ ゆがんだ世界がわたしをさいなむ.....	25
・ 半年にむなしい希望をたくして.....	35
おかあさま、足が立たない！.....	42
小康をえてラジオを楽しむ日々.....	46
初めてあじわうさびしいお正月.....	50
やむなく高校を三年で中退.....	54
西洋医学から漢方治療へ.....	61
わたしは完全に両眼を失明した！.....	66
英語・点字、そしてタイプを習う.....	70



〈第二部〉ロバータ あなたのをかしてください

安住の世界を童話創作にもとめて……………78

母のたすけをかりて童話を書……………87

はじめての童話集を出版……………93

児童福祉文化賞を受賞……………99

転機——盲導犬への心のいざない……………104

〈第三部〉ロバータ 覚えているでしょう

英国盲導犬協会へ申請の手続き……………116

申請は受理された！ 英国へ旅だつ……………119

ハックスレイロード二十二番地……………125

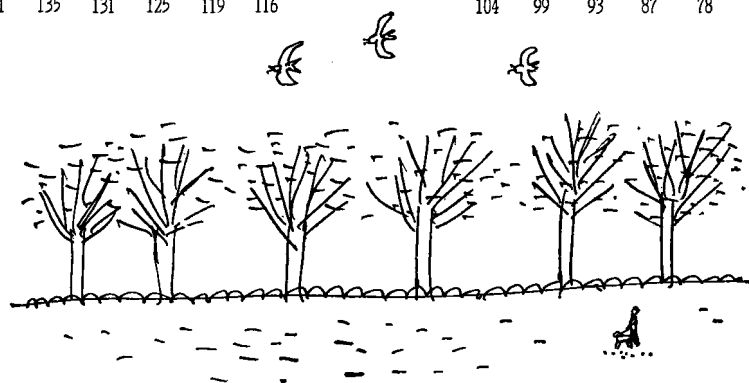
リーミングトン訓練所にはいる……………131

同僚五人となかく訓練開始……………135

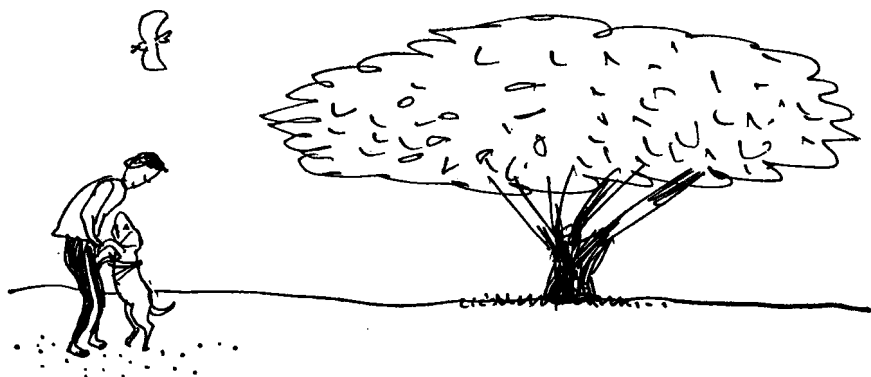
待ちに待ったロバータとの対面……………141

盲導犬に対する二つの鉄則……………146

ロバータとの真剣な訓練……………152



すぐれた指導で訓練に自信をもつ	161
訓練所のしんせつなスタッフたち	168
ゆかいなわたしの仲間の横顔	175
また会う日まで、さようなら	184
帰国の機内で見せたロバータの能力	189
〈第四部〉ロバータ さあ歩いていきましょう	
父母に示すロバータの愛情	196
四冊の雑誌でまがりかたを研究	200
日本の道路になれたロバータ	202
「ねえ、ここ、角よ。」	208
ロバータとすごす富士山麓の夏	211
あとがき	214



装本 辻村益朗

ロバータ 話してきかせましょう

〈第一部〉 失明から童話創作をはじめるまで



へ第一部によせて

ロバータ 話してきかせましょう

あなたと会うまでのことを

ロバータも大すきな

わたしの おかあさん

おとうさん

そして おねえさんが

どんなに心をくだき

知恵をしぼって

わたしの幸福への道を さがしてくれたか

やがて その道の 行くききで

ロバータ

わたしが あなたに会えるとは

だれも 知らなかったけれど

ロバータ 話してきかせましょう

どんなに たくさんの人々が

おしみなく 力をかしてくださったかを
だれも

「かわりに やってあげましょう」

と いわないで

みんな

「ひとりでする方法ほうほうを 教おしえましょう」

と いいました

ロバータ 話してきかせましょう

わたしが 海をわたって

(盲導犬もうちょうけん) 訓練くんれんを受けにくことを思いついたとき

どんなに みんなが おどろいたか

それから心配し 期待きたいし それでも やっぱり心配したかを

でも ロバータ

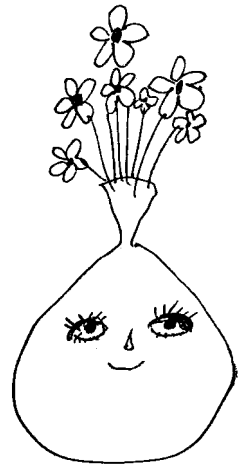
わたしが あなたのような よい子をいただけると

もし このとき

みんなが知っていたら

だれが 心配なんかしたでしょう

八月四日の悲しいできごと



暑い日であった。わたしは買ったばかりの大学ノートの包みをかかえて、都立大学駅に向かって歩いていた。とまっている一台の自動車のわきを、ちょっとよけて通りすぎようとしたとき、そのかげから、はでな緑色の洋服をきた女の人が、こちらに歩いてくるのが見えた。すぐそのあとから、ほとんど同じ服装の人が歩いてくる、と思ったとたん、それは一つに重なった。ひとりの人だった。

電車に乗り、窓ぎわに立って風をうけながら、「一冊は世界史、一冊は解析(一)、それから幾何と生物と……。」と、わたしはこの新しいノートの使いみちを頭の中でわりふった。包みの充実した重みが腕に快かった。

うちへ帰り、包みを机の上において、わたしはまず予定表を見た。八月四日。幾何と生物をする日だ。前からたのんでおいた幾何の参考書が、きのうとどいたし、とてもいいつごうだとわたしは思った。本立てからそれを取りあげて開いてみた。図解は鮮明だし、説明文も、いやにこみあってなくてなんとなく感じのいい本だった。買う前に、どんな参考書をえらんだらいいかと相談した知人が、この本を教えてから、「あまり数学の得意でない人にはいい本ですよ。」と、つけくわえたことを思いだして、おかしくなった。夏休みのはじめから作ってやってきたスケジュールも、もう身についたし、必要なものはずぶん整った。

た。前の日、母がデパートで注文してくれた机と回転いすは、二、三日中に配達の手配が完了した。きょうからいちだんと馬力がかけられそうだと思った。

まず洗濯してこよう。これはわたしの趣味の一つだった。根をつめたり、馬力をかけなければならぬときは、ことさらにこういうことをしないと、あとの調子がよく出ない。ブラウスを二、三枚、ソックスとそれに何枚かのハンケチをふる場であらい、井戸ばたへ出て、ポンプをたくさんくんだ。井戸のつめたい水でそれをゆすぎ、ほしにかかった。

ふと見ると、いま使ったたらいの横に、あらいあげた赤地にしまのあるハンケチを落としているのに気がついて、とりにもどった。かがみこんでひろいあげようとして、わたしは、なあんだと思った。それはハンケチではなくて、色刷りの広告の紙が半分、水にぬれて井戸ばたのコンクリートにはりついているのだった。わたしは手の甲で、きのうから左のまぶたにできているものもらいを、ちょっとこすると、そのままとってかえして、また洗濯物をほしつづけた。ほし終わって裏口からうちにあがりかけたわたしは、またたらいのわきにハンケチが落ちていると思った。ときどきできるものもらいだが、ちょっとした場所のかげんで、こんなに目の錯覚をおこさせるとは、いたずらなものだと思った。

けさ、髪をといたときには、ものもらいは、そんなにふくらんでいなかったが、どんなぐあいになっているんだろうと、わたしは母の鏡の前にすわった。鏡がいやによれていて、引き出しから布を出してふいたが、あまりきれいにならない。まあかまわないと、わたしはずっと鏡に近づいてのぞいた。あまりふくらんではいなかった。けさとはほとんど同じように思えた。

唇ごはんのときわたしは、母と姉に、きょうから、いよいよ本式の試験勉強だといった。

「いままでは序の口だったから。」と、わたしはつけくわえた。

「そう、いいね。でも、あんまりむりをしないでやりなさいよ。からだがいちばんたいせつだから。」と、母がいい、姉は、

「それで、もう受ける学校はきめた？」ときいた。

わたしは、「いま作ってある予定表どおり勉強して、夏休みの終わるときにきめるの。自分の実力をみて自分できめるのが、いちばんいいでしょ。」と、みえをきった。

姉も母もわらっていた。わたしは思いついてノートの包みをとってきて、ふたりに見せた。

「わあ、書きよさそうなノートね。あたしもほしいわ。」と、姉がいうので、「こんど買ってきてあげるわね。」と、わたしは約束した。

わたしは机の前にすわって、さっきの幾何の参考書をひろげた。まず、いすを深くひきよせて姿勢を正した。あまり得意でない科目をするときは、こうしないと長つぎがしない。読みはじめてわたしは、ちよつと窓の外に目をやった。雨でもふってくるのではないかと思った。あいかわらずむし暑かったが、空はそうとう明るく、いますぐふってくるようすもなかった。本のはじめのところは幾何の概論のようなものだから、内容はべつにこみいつてはいなかった。それにしても、あまり印刷がよくない。ところどころずれたような箇所がある。さっき見たところは、とてもいいと思ったけれど。わたしはなおも読み進んだ。

円と直線の図があった。それがまるで水にういているようにゆらゆらして見える。わたしは片手でものもらいのできている左の目をおおてみた。図はびったりと平面におちついた。でもページの上がなんと

なく暗い。わたしは思いついて窓ぎわのレースのカーテンをぜんぶしぼってみた。あまり変わりはなかった。それで、こんどは窓のしきいに腰をかけて読みはじめた。そのとき玄関のベルが三つ鳴って、父が帰ってきた。わたしたち三人は、ほとんど同時に玄関にむかえに出た。

わたしたちはいつもよりすこし早く、夕食の膳をかこんだ。

「おとうさま、きょうはいかがでした。なにかおもしろいお話ありますか？」と、母がきいた。

「そうだな、ううん。」と父は会社の話、工事の話、近くまた出張しなければならぬことなど話した。

父は土木技師で、大成建設株式会社に長く勤めていた。

「それにしてもあいかわらず電車がこむなあ。ものすごいよ、まったく。学生が休みだというのに、これなんだから。」と、父はいい、「それで、たづのほうはどうなんだ。」ときいた。

「いよいよ、きょうから本番です。」と、わたしは答えた。そして、望んでいた参考書はぜんぶ、手もとにそろったこと、毎日のスケジュールは、とてもうまくいっていること、このままの調子でもっていつて夏休みの最後に、受験する学校をきめようと思っていること、それからきょう、いい帳面をたくさん買ってきたこと、などを話した。

「ううん、そうか。いいな。なにしろあせらずにやるのがいちばんいい。」と、父はいった。

食後しばらくくつろぐと、姉は立っていつて自分の机のところでなにかしはじめた。母も台所へ立った。

わたしも自分のへやへ引きあげようと思いつながら父に、「わたしのこんどのものもらい、へんよ。いろんなものを見まちがったり、本の字がういて見えたりするのよ。」と話した。

「ううん、そうか。」と、父は新聞から目をはなさずにいった。

わたしは立ってへやへいきかけた。

父はかたわらの箱をとって、ちょっとかざすようにし、「これはどうだ。」といって、こちらを向いた。

「なんだか、うっとうしくて見にくいわ。」

わたしは片手でももらいの目をおおって、「強力メタボリン」と読んだ。

「なんでもないじゃないか。」と、父はいった。

「そうなの。こっちの目をかくせばなんでもないのよ。」といいながらわたしは、なにげなく右の目を手でおおったとたん、あたりのものすべての輪郭線が消えさった。あたりいちめんもやのように見えた。

「ちょっといまの箱、持ってみて！ こっちの目、なにも見えない。ちょっと持ってみてよ！」

「なにも見えない？」と、父はおうむ返しにいつて箱を持った。ずっと近づけて目の前に持ってきて、そこに箱があるとみとめるのがやっとだった。

「すぐに目医者にいこう。」と、父はいった。わたしはだまって出かける用意をした。

姉がはいってきて、「どこかいらっしゃるの。」と、父にきいた。つづいて、はいってきた母は即座になにか感じて、「どうかしたの。」と、ひとこといった。

「たづを目医者につれてってくる。こっちの目がへんだ、見えないっていうんだ。」

「見えない？ 見えないって、どんなふうなんですの。そんなに急に——。」

わたしは壁のようにだまつたまま、つつ立ってきいていた。

父はなにか母に説明しようとしてみたが、できないとわかると、「わからん。とにかくいつてくる。」と玄関のほうへ出ていった。わたしはそれにつづいた。

靴をはきおわった父に、母は、「そんなに急になってこと、あるんでしょうか。」といった。

「そういう例があるってことをきいてるから心配してるんだ。」と、父はいらだつていうと玄関を出た。

藤原眼科は、学芸大学駅のすぐ近くにあった。医師は藤原正子氏、つまり女医さんだった。この人は、うちの遠い親戚にあたるので、わたしも小さいとき、結膜炎などでなにかこの医院にきたことがある。としは母より一つ上ぐらいで、ときばきとした男まさりの人だった。患者も叱りとばすようなところがあり、それがかえってみなに評判がよく、いつも玄関から患者のはきものがあふれているほど、はやっていった。医院の玄関は、昼間とはうってかわって静かだったが、まだ表の戸にかぎはかかっていなかった。

ときならぬよびりに、かけだして出てこられた先生に父は、「おくつろぎのところおそれいます。診察をおねがいしたいのです。たづがばかに見えにくいといえますので。」といった。

診察室の戸があげられ、あかりがつけられた。まず視力をはかることになった。わたしはこの診察室の勝手をよく知っていた。へやの幅が視力検査に十分なだけなので、鏡に写してそれをおぎなうようになつていた。わたしは視力表を背にし、鏡に向かって立った。鏡に写ったものは全体としてぼやけていた。しゃもじで左の目をかくすと、それがぱとはっきりして視力表は下まで見えた。

「右の目をかくしてごらんさい。」と、先生はいわれた。

わたしは、しゃもじの位置をかえた。とたんに、写して見るべき鏡がもやのなかに消えてしまった。

先生はわたしを診察のいすにすわらせ、懐中電燈にコードのついたような道具をとりだし、電源についてからへやの電気を消した。

「まっすぐ前を見ていてください。」といって先生は、顔を近々とよせ、その道具で目の中をのぞいた。

「そのまま、まっすぐ前を見て。動かないで。すこし右を見て。もうすこし右を見て。こんどはずっと左を見て。」

長い長い時間だった。右の目、左の目、また右の目、左の目とくりかえしのぞいてから、先生はへやの電気をつけ、また席にもどってすわった。父は待ちきれず、「どんなふうでしょう。」とたずねた。

「ええ。」と、先生は顔の汗をぐっとふいて、「ちょっとわかりませんねえ。目の中がでんぐりかえっていて、まるでなにがなんだかわからない状態なんです。」といい、わたしに「いたみはぜんぜんないんですね。」ときかれた。

「はい。」と、わたしは答えた。

先生は立ってクレゾールで手をあらい、それをタオルでふきながら、「いつ気がついたんですか。」とたずねられた。

「けさからへんだったのですが、ものもらいのせいだと思っていました。」

先生は、「ものもらいはぜんぜん関係がないのです。」と、つぶやくようにいい、こんどは父に向かって、「あすの朝またいらしてください。わたしも考えておきます。わたしの先生にあたるかたにもご診察いただいたほうがいいように思います。ご紹介しますから。」といわれた。

「そうですか。どうぞよろしくおねがいます。」と、父はいった。

わたしたちは藤原医院を出た。

わたしはあいかわらずだまっていた。これはいったいどういうことなのか。どのくらい大きな、どのくらい重大なことなのかがわたしにはわからなかった。視力一・二のわたしの目の視力がさがるなどという